



三月の天地

かま生

春の曙。東天紅と告げ渡る鶏の聲に呼起されて、
 耳をばだつれば、早や烏栖を出でし鳥の聲、檐端
 に踊る雀の足音など、殊更に春めきてゆかしく、
 空高く快晴を報ずる雲雀の清く朗らかに、さては
 山際近く枯尾花踏み分けて友誘ふ雉の強く澄みわ
 たりたる聲などの聞ゆる、又一入の趣あり。

遠山近郊總て一帯となり、神韻漂渺の中、幽かに
 森あり、林あり、堂塔殿閣亦斷續隱見す。此端

總ての聲、總ての形、總ての色を、盡くうす紫に
 あるは淡紅く包み渡して懸けるは、名に負ふ春霞
 なり、外山の霞、夢野の霞、霞か雲か將た雪か、
 霞に消ゆる雁の聲、何れ面白からざるものやわ
 る。

虹、漸く現れ、燦爛たる七色、大空を彩つて、
 次第に朦朧として脚下に消ゆ、何等の壯觀ぞや
 げに靄黓は、春の空の本色、清澄は、秋の天の
 特徴、秋の光は、義を表し、春の光は、仁を示す、
 故に曰く、

春風一たび吹ひて萬物自から生ず、と。見よく
 長夜の眠より醒めてやうく泥押し分けて顔さし
 出し、まばゆげに細目に開きて、川上の井堰の蛙
 の沮洳たる雜草の片蔭に、カラ〜と笑ふあり。

稻株高さ沼田の面には、田螺のイザリ始めし文字

も見え細流川の砂黒き邊には、蛭の頭もほの見えつ、蛭の背もゆるぎて現れつ。

波穩かに、白帆の寛く通へる春の濱邊には、蛭、蛤など競いて拾ふ童あり、網に上りし白魚の賑かさに蛭子顔せる漁夫もあらむ。

梓弓おして春雨長閑に降り來る。晨に、彼が暖く草木の上に露へるを見ては、誰か彼の鴻徳をたへざるものぞ、彼果して志士仁人の心ある乎。

更に深夜に、彼が閨の板戸にそぼてる點々を聴かば、何人か其幽懷を動かされざるものぞ、彼春雨、抑亦騷人墨客の懷ありて然る乎。

我草庵に、蓬は盛に延びぬ。我後園に、山椒の若芽高く香りぬ。行手の傍の芝生に、土筆の立つもの高低二三本。山の横面はる風に、握拳の早蕨や三五本。ムットして歸りて門の若柳に、は、

笑まされては慚愧の至

種蒔には、煙草、夏葱など、中旬よりは、隱元豆、蒞蓀菜、茼蒿、夏大根、夕顔、胡麻、茄子、南天、紫蘇などあり。

植替には、榊海棠、柳に櫻、柘榴撫子橘など、大抵の植物可ならざるものなく。

接木には、梅、桃、杏、枇杷など、根分には、胡蝶花、燕子花、鐵扇、寒菊など、之亦大抵可なり。

春分。月の廿一日頃、太陽は赤道上に直射して我に在りては、晝夜平分の季となり、鴻雁既に遠く北に去つて、輕快なる燕は、勢よく黒潮を越えて翔り來る。

雀に雲雀、金雀、金絲雀や、山雀、小雀、四十雀、駒鳥に鶯、頬白に鵲、白など、一切の鳴禽類は、舉

げて嬉しく陽春三月を歌ふ、宮徴の調、春の林に於て殊に妙なり。

春山笑うて言はず。木蘭は葉に先ちて紫濃く、玉蘭は其名の如く色鮮かに瓣大さやかに、辛夷は稍小形に、木瓜は紅深みて、各待兼顔に咲競ひ、堇菜あり、蒲英菜あり、稀に開くもの早や兩三、尾の上の彼岸櫻は逸早く綻びんとす。

玩弄具及遊技の話 (承前)

關 根 正 直

(九)ぶらんこ とは誠に妙な名で、是れは西洋傳來の遊技とのみ誰れも思つて居りますが、實は千年餘り以前に我が國に行はれたもので、昔はユサハリといひました。ユスブリの意味で、漢字には鞞鞞とかく。支那では漢武帝の時後庭の遊戯だと

いひます。我が國でもそれを摸したので、既に嵯峨天皇の御作の、鞞鞞篇といふ詩などがありますから、實に古い事が分ります。尤も此の古風は中絶して、近年より西洋の遊技をとつたのでありましやう。

(十)子をとりく すべて鬼を出す遊技は佛教家の説より出たもので、地獄の鬼が来て、子供を捕へんとするを逃げる意味である。此の「子をとりく」といふ遊技なども、三國傳記といふ書に惠心僧都がある經文を見て、其の心をとつて始めた業で、例の獄卒が子を捕らんとするを、地藏菩薩が前に居て、子供を保護して捕らせまいとするに象どつたのだとあります。もし惠心僧都の時代からあつたとすれば、千年近くの昔から行はれた古い遊技です。

(十二) 隠れんぼめかくし 嬉遊笑覽に、宇津保
 榮花物語などに隠れ遊びとあるのは、今のかくれ
 んぼの事だとあり。又今は「目かくし」と「かく
 れんぼ」と二種なれど、もとは同じ戯れだともい
 つて居ます。又目かくしは、昔めんないちどりと
 云うたともいつて、其の詞に「めなしどち」聲
 について「ませませ」と囃した事をもかいてありま
 すが、かういふ囃し詞も、昔のは幾らか上品に聞
 えます。

(十二) かけくら 昔は走りくらべといひ後に訛り
 て走りこくらともいつた。今より三百年程前の狂
 歌集(古今夷曲集)に「帆をかけてひいふう三つ
 の浦風は走りこくらや足早き舟」といふ歌が
 あります。「ひいふう三つの」といふので、「一い
 三のかけ聲で走り出した事も知られます。

(十三) つばな 〳 〵 これは今小兒達が口には囃し
 てゐるを聞きますが、遊技はせぬやうであります。
 近世まで行はれた仕方は、嬉遊笑覽にかいてあり
 ます。

つばなぬこ〳〵鬼ごとの一種に鬼になりたるを
 山のおこんと名付けさをひつれて下にかいみ共
 々「つばなぬこ〳〵」といひつゝ、抜くまねびを
 して終に鬼にむかひ人さし指と大指にて輪を作
 り其の内より覗き見て是れ何と問へば答へては
 うしの玉といふと皆逃げ走るを鬼追かけて捕ふ
 るなり

とあります信實朝臣百首に「いとほしやまだかぶ
 ろなるうなむども焼野にあまたつばな抜くなり」
 といふ歌があります是れも子供の遊技を思ひ寄せ
 てよんだものと見えますから鎌倉時代から既にあ

つた事と見えす

(十四) 芋むしころく 是れも離し詞ばかりで遊

技は廢れたやうですが、例の嬉遊笑覽にはかいて
あります

帯にとりつきとりつきしてかゝみ居てゐるく其
のはやし言に「芋虫ころく」瓢箪ぼつくりこ

といひつゝ暫くあるきて先に立たる者「わたの
くせん次郎」と呼べば最後に居たる者離れ出

て前に来て「何用でござる」といふ呼たる者「手
前今迄何して居た」答「柵から落ちたばた餅を

食て居た」それならば雨がふるか鎗がふるか見
てこ」といへば見にゆくまねをして雨がふる鎗

がふると問ふまゝに背かず答ふ其の時前がよい
か後がよいかといへば前がよいといふ「それな

らば前にゐよとてそれを先の第一番に居らしむ

さて始の如くはやし歩むなり

とあります。是れも前のと同じく今は「芋虫ころ

く」といふ離し詞ばかりが残つて遊戯はせぬや

うでありますがいかにございますか

なは此の外にもいろくくの玩具や遊戯の事は古書

に見えてをりますが目今絶えたものは略して申し

ませぬ現在残つて居るもの又幾らか變化して傳は

つてをる事の何時ごろからあつたかといふをあら

くお話するつもりがつひく長くなりまして誠に御體窟

(完)

雜祭の話

せく生

(一) 雑遊びのこと

雑遊として兒女が戯に人形の御客事などする事は

實に其の本能より出でたる自然の遊戯ともいふべ
く、古より上下一般に行はれたる風習なりき。然
れば朱雀村上の御代頃(今より凡九百七十年前)よりの物語類に

は(榮花物語第十四あさみぢりの巻に、寛仁二年の春御堂關白道長公の御子中將長家卿、御年十五ばかりにて、御形いとうつくしく、よき御智のほどにおはするに、侍從中納言行成卿の姫君、御年十二ばかりなるを幸らばやま、さるへきたよりして、御堂殿の御けしきかうかひひ申し給へば御堂の御詞に、)この事多
く見ゆ。中世の末より近世の始にかけて、三月三日の雛祭一般に行はるゝに至りても、平生之を

玩ぶを毫も古に異ならずして(伊勢山田邊にては小米難といへる五六分許の紙雛を作り、其の衣服を岐宜といひ、丹青もて文を色どり、尙紅絹の切なごそへて、夫婦奴婢なんご揃へ、之を客間居間臺所などある家やばり紙つくりにて据ゑて、人家平日の睦しき様をまれば常の遊びさせし事、今より百八十許前なる享保頃までは行はれたりといふ。)諸地方の遊び様まち／＼なりき。今尚子守などせる田家の兒女

が「ひひな草」もて雛遊するは至る所に見るを得べし。(伊勢桑名邊にては、重九の節句即九月九日を「かつらこ(葵葛子)の節供さいひひひな草(かつら草)とい

ふ。葵葛子を作る)に用ゐるが故なり)

(二) 上巳の祓のこど。附 雛遊との關係。

三月上巳(第一の日の日、水邊に祓する事は早く支那より傳りき。後巳の日には關らずして其の三日に決せり。其の式の一は天兒這子(共に一種の)を陰陽師より受け、之を贖物又は撫物といひて、一切の我が災禍は之に負はせて流水に捨つるなり。加茂保憲女集に「おぼぬさにかきなでながら天兒は幾十の人の淵をみるらむ」又源氏物語須磨の巻に源氏須磨へ左遷の時、三月朔日巳の日にて浦邊に出で、陰陽師をめして祓せさせ給ひ、舟にこと／＼しき人形をのせて流させ給ふ云々。の類多く見ゆ。

江家次第(大江匡房の著書)の立太子の條に、太子陪膳の

事を記して曰ふ。「宮稚き時女房を陪膳とし、女藏人之に傳く。藏人の一人、器二口を御盤に居ゑて持參す。即て御三把を受け帳中の天兒に奉ぐ云々。但常の天兒の土器を撤するとありて後、比々奈に供す」とあり。日次記事に「上巳雛遊本是贖物之義而所謂這兒則解除之撫物也」。國朝佳節錄に「三月三日兒女制三紙人一爲翫者物之義乃祝具也」などある如く、中世の未三月三日を雛祭の期と定めしは(臆説二三)この上巳の祓の遺意に雛遊を加へたるにて今尙雛祭と稱するにても然思はるゝなり

三) 三月三日雛祭の起れる始。

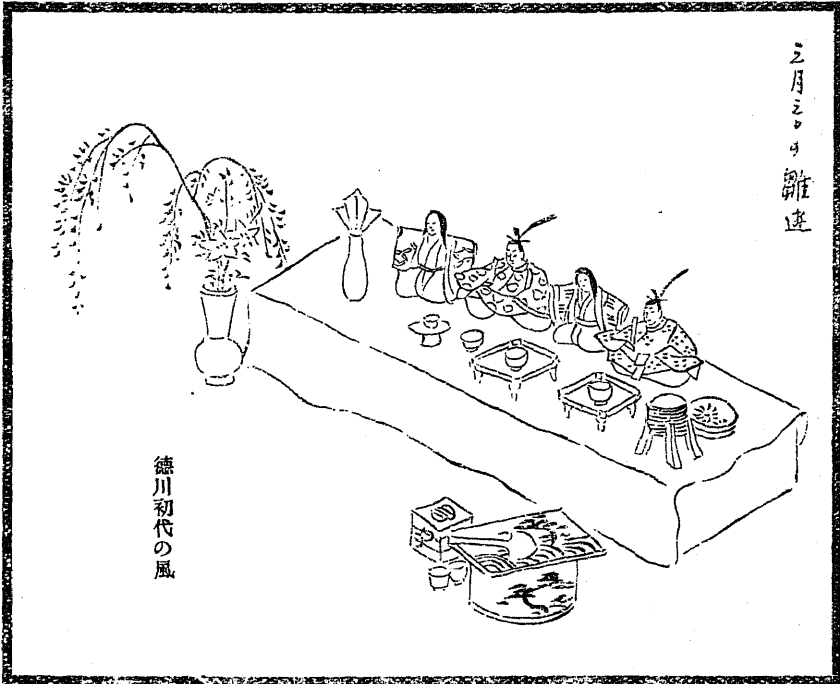
飛鳥井榮雅(御土御門天皇頃の人今)の三月三日雛祭の歌に「都にはやよいの空ののどけて雛の遊も思ひやるかな」とあれとも、當時の年中行事を記載せる書物の中に、三月三日の條に雛の事を記せ

るもの一もあらざるを見れば、榮雅は會雛を思出せしか、或家にて雛遊せるを見て咏ぜしに止まり決して未だ世間の風にてはなし。漸く下りて天正九年頃(今より凡三)の書(無名)に初めて「雛は人形なり」とありても其の時を書かず。尙下りて徳川家綱の寛文三年に印行せる書(増山)に臆氣にも其の三月三日の條に「雛遊こそ慥な期もあらねば打まかせては雛なるべし云々但聊餐應あらば此頃の俗にまかせて今日の事にも成ぬべし」とあれば此れ等を合せ考へて、先天正以後徳川の初代(凡百りび)までに定りしものと見て可なり。

四) 雛の調度

雛の調度はその製につれて品に上下ありき。紫式部日記上卷に上東門院皇子を産み給ひし事をいへる條に「稚宮の御まかなひは中納言の君ひんが

しにまゐりすへたり
 き御臺御皿ども御著
 の臺洲濱なども難遊
 の具と見ゆ云々」(之
 御誕生の稚宮に据え奉る
 調度をいひなるなれども
 當時難の調度の様)。斯く
 を證明して餘あり)。斯く
 も宮中の貴き邊の御
 遊は美しかりし様な
 れど、民間の賤しき
 際にては、相應に質
 樸簡易のものなりし
 事後世の小米雛姫瓜
 姫髪葛子の遊を以て
 も推知し得べし。徳
 川家重の寶曆の頃



三月の雛遊

徳川初代の風

(今より百五)の著書には「
 千年許前)の著書には「
 近年は雛配膳の調度など
 殊の外美を盡し金銀を鏤
 めなどするとはなり
 ぬ。然れども貧賤の家に
 は蛤の貝殻に飲食を盛り
 て供するも亦多し」(都光
 など記せる類多し。
 貝殻を雛の調度に用ゐ
 て主に其の飲食器となせ
 るは濱邊の遺風の波及に
 も因るべけれど、又其の
 品の愛すべく且面白味あ
 りて、昔よりは是のみにて
 貝合などの遊わりし程な

れば、如何にも雛の調度として似つかはしきより終に一般に之を賞用するに至りたるならむ。

五) 雛の供物。

雛の供物は地方により又貴賤によりて一様ならざれども、其の主なるは草餅と白酒となり。

白酒 支那には桃花節(三月)あり。この日桃花

を採りて酒に浸し飲めば必病を除き顔色を増すと稱し、名けて桃花酒といへり。(桃に就いては支那に

壽に因みあり。唐の徳宗之の日を桃花節と定め祝日とす。曲水宴と共に夙に我が國に傳はれり)此の儀我れ

に移りては終に此の雛祭と同日となるより、酒は亦雛に供へられぬ。其の桃酒の何故に白きかを考

ふるに、母子の健全をといふ思想より聯ねて乳汁に擬せしに非ずやといふ人あれども、是亦彼の貝

殻の濱邊の遺風なるが如く、昔の酒は一般に白酒なりしが後世にまで傳へられたるならむ。

草餅 文徳實錄を見るに古は三月三日母子草を蒸擣きて餠を作り之を食ひて母子の全きを期した

るの風ありき。當時恰もこの日は上巳たるを以て母子(即ち遺子)といへる紙人即雛にて水邊に祓す

る事行はれたるより、母子餠はいつしか遂に其の雛に供へられぬ。爾後祓の事すたりても草餅を供

ふる雛遊は益々行はれて、母子草も遂に移りて蓬とはなりぬ。是れ其の様のよく似たるのみならず

餅となすに寧勝ればなり。其の何故に菱形とするかは明ならず。考ふべし。

六) 雛の種類。

雛には地方的の面白きに吉野雛會津雛琉球雛等

あり。古代には絲卷雛、紙びな、次郎左衛門雛等あれども、現今一般に行はるゝは親王形若しくは

内裏雛或は札頭(紙幣)といへる神功皇后武内宿

襦などなり。東京にて專雛を商ふは日本橋區十軒店にして(多く古代雛を藏するは本所區石原町の戸崎萬次郎氏 神田區旅籠町の清水清風氏などは有名なものなれば好古者流ば宜しく就きて一覽を乞ひ給へ)凡て古は大形の物流行せしが、今は只田舎の大盡びきとなりて、漸次小形となりぬ。衣裳は錦金襴の類を用ゐ、顔は木彫象牙彫を用ひて小道具までも金銀珠玉の贅澤を極むるに至れり。(去る三十年の事なりしを、佐野常氏伯の令嬢は有馬家へ嫁し折に持参せし雛人形一切の道具には今の禁裏の有様を寫して、舞樂殿まで備はり、伶人倭舞、胡蝶舞、關陵王の舞などする様をも巧に細かに作り成し、奉侍の官女も此までの者は武家姿なるが、姿は錦の袷衣紫色の袴髪も繪元結にて結びたるにて一は座したる姿、一は立ちて髪の色を見たるを現はせるなり。外に長柄、楸柄の銚子の)(又本郷島島の岩崎臺守万島臺等皆金銀を鑲めたりといふ)(久彌男は先頃令嬢を擧げて、今面は其の初節句なるより駿河臺の岩崎家を初め、諸家より贈り來れるものを合せて一揃の雛壇を作れる由なるが、其の價は總て三千圓)回顧すれば明治の初年十二三年頃までの破壊時代には、人の雛壇をといふものさへわらずなりて、古き美術品と共に多く外人の買占に逢はんとせしが、其れ等の反動は漸く國運の氣

運を盛ならしめて、雛なども徐に再興し來り、今日は殆ど昔の様になり歸り、嫁入道具の一として必數ふべき物と迄に至れり。

序にいふべきは、是は雛とは意味少しく異なるべけれども、又其の一種の流行とも見つべきは、先年醫學博士松本順氏の令嬢婚嫁の節、氏は自が幼時の面影を移したる抱人形を作りて持参せしめたるより始まりしか、上流社會にては其の兒女の遊ぶ人形に父母たる自己の幼時の面影を移したるが多し。

結婚論 (承前)

野本生譯

未婚者は、其の單獨なる事情の爲め、即ち、獨身であるといふ點に於て、屢、幸福なる場合があ

る。彼れは、自己の爲めに、自己一人の計をなせばよいといふ點に於て、或は又、自らは、自らの主人にして、社會、邦土の法律の許す限りは、何處に行き、何事を爲すも、全く自由であるといふ點に於て、自分を慰むる事が出来るかも知れぬ。併し、自分は夫婦といふ全きもの、其の一半に過ぎないもので、其の生活には、必ず、何にか足らぬものがあつて、若し、其れが満たされたらば其の生活は、定めし、もそつと完全するであらうといふことを知て居る。又、假令、彼れ、事業に成功して、富、己れの手申にあるも、彼れと共に其の成功を喜ぶべき筈の或る者が欠けて居ることを自覺するに違ない。彼れは、又、何故、彼れが事に當て、其の全力を注ぐことが出来ないかを怪むであらう。かくて、遂に、自分をして、進んで

發奮努力せしむる爲めに、其の刺戟となすべき或物が、自己以外に、必要ではあるまいかといふ疑を起すに至るであらう、假令、財、豊かにして、衆人皆己れに媚び、友人雲の如く、歡樂、常に堂に満つといへども、猶且、其の生活を圓満ならしむべき或物の、不足して居るを感ずるであらう又、假令、自由に、其の好む所に旅行し、衣食住に、あらゆる贅を盡す事を得るも、彼れは、猶、其の日常の生活が他の人々より、却て、つまらなく、又情なく感ずるであらう。米國の金満家で、又、其國の大新聞の持主で、始終、旅へ出て居る金は遣ひ切れない程あり、何でも、己が欲するものは意の儘になるといふ有様で、諸邦に、立派な邸宅、別莊を構へ、遊船は更なり、馬なども、數多、飼て居るといふ、誠に何不自由なき身分の人

が、或る時、馬車を走らして行く途中、一人の知人が、其の最愛の妻と、二人の子供とで合乗をして、同じく、馬車を驅て來るのに摺れ違つた。其の時、此の金満家が、傍の友人を顧みて、「わの人の資産は、引括めたところで、予の一ヶ年の収入の半にも足りないが、夫れでも、我が今日の生活よりも、遙に幸福であらう」と言つたさうである。又、其の友人が、然らば、此の他に、君の友人で、君より幸福なる人ありやと、尋ねた時、「然なり、ジエームス、ゴルドン君ならん。彼れは、已が傍に良妻を有し、其の膝の上に、愛らしき小兒をのせて居るから」と答へたさうである。未婚者と結婚者との場合は、正に斯の様なものであらうと思ふ。

扱て結婚其物に就ての研究は、以上の説明によ

りて、充分であらう。是れに關する、六ヶ敷き、其の細目に亘りての議論は、元より別箇のものがあつた。併し、何處に何人も、他人の爲めに、所決することの出來ない一つの疑問がある。其は、別ではない、人が先づ、一女子を認めて、已が妻にしたいといふ意を起こさせるところの、其人の心其物である。「愛の指す所誤なし」といふ昔の格言は、其の格言の書かれた當時と同じやうに、今も、猶、其の眞理たることを失はない。然れど、多くの青年は、此の疑問を解決することが出來ないで居る。彼等は、神聖なる結婚、即ち夫れによりて、幸福を期すべき結婚は、愛に依るべきものであることは信じて居る。又恐らく、斯かる結婚を望み得べき婦女子は、彼等の眼中にあるので、且つ、彼等自ら、其の女子を愛するが如く感じて

居る。然るに彼等が其の女子を娶ることを躊躇する。而も、其の何故なるかは、其の當人達にも説明することが出来ない事がある。又同じ場合に、別の女子があつて、已れ自らは、其を愛しては居ないが、其の女子は、他の女子とちがひ、已に對して、多くの、處世上の改良、上進、即ち、已が業務上の便益、其他種々なる便宜を齎らす事が出来るといふやうな事を考へて居る。或は又、意中の女子を得ることが出来ても、其を娶るといふ場合に於て、両親の同意を得ることが出来ない事がある、其は、假令、公然に反對するのでなくとも、親としての、冷淡無情は、公然の反對よりも、更らに、一層冷酷で、殺生である。されば、彼等は、其を娶らんとすれど、両親を憚り、且つは又、友人の思惑、如何を心配し、遂に疑惑と混亂に了

てしまふのである。併し、何れも畢竟するに、彼等を引きつくる所の力の其の一方は、眞實なる心であるが、その他方は、唯、利害得失とか、斟酌、事情とかいふ間接的のものに過ぎないのである。

女子の爲めに、徒らに、種々なる心配を爲して、是れ所謂、戀愛なりと、誤解するは、斯かる青年の常である。併し、戀愛には二心なき筈のものにて、其の二心あるは、單に「所得」を意味する一箇の俗望に過ぎない。決して、戀愛ではない。予は、或る青年は、單に、此の俗望の爲めに、結婚するといふことを公言するに憚らない。此處に、「所得」といふは、元より、金圓財物を指すのではない。凡べて、形而上の利得を意味するのである。金の爲めに、女を娶るは、人間が爲し得るところの、最醜、最劣の行爲である。男子は之れが爲め

に、墮落し、女子は、其の受くる所の冷遇の爲めに、萎靡してしまふ。多くの青年は、彼等が有せざる、或る特長とか、藝術とか、又は品格とかを備へて居て、之れが爲めに、人心を動かすといふやうな女子を娶らんと心懸けて居る。假令其の女子の才能とか、旅行の智識とか其の美貌とか、或は又、社交上の立ち振舞、化粧の巧拙、衣服の着こなし、其他、來客の接待振りなどである。青年の輩は、兎角、此様な女子を理想の妻として夢みて居るらしい。成程、此様な女子は、外觀、立派で、且つ、自分が、或る地位を得んが爲めには、大に助となり、又、常に、知己朋友を遇すること、が巧みであるかも知れぬ。而も亦、世間に向つて、充分、誇るに足ると思ふかも知れぬ。又實際、誇るに足るかも知れん。併し、自慢でふ虚榮心の満

足は、眞正なる心の満足とは違ふ、虚榮心の満足は、得ること易くして、而も又、容易く消えて仕舞ふ。虚榮の爲めに、妻を娶る者は、數年ならずして、其の家庭に、裝飾物以上の或る物が入用で、夫れが全く缺けて居ることを感ずるに違ない。何となれば、世に、一人にて、有用、裝飾の二者を兼備せる婦人は極めて少いからである。人若し、單に彼女は或る技能を有して居るからとか、又唯彼女よりも、此の女がよいからとか、或は、彼女には敬服すべき點があるからとか、又或は、同情に富んで居るやうであるからとかいふので以て、妻を娶らば、到底、幸福なる結婚を望むことは出来ぬ。此の様な、感情上の條件は、一として、眞實、幸福なる結婚を成立せしむべき要素とはならない。生涯の友となり、世に在る限り同棲して、

苦樂を共にし、良人の母には、其の娘となり、其の子には母となるべき大任ある女子は、更に、或る他の動機に因りて、青年の心を動かさしむるところのものではなければならぬ。即ち、眞實、戀愛的、愛情を起こさしむる所のものでなくてはならぬ。此の一片眞實の戀愛だにあらば、他は求めずして、悉く附隨して來るので、前に述べたる諸件は、其の一は勿論、仮令、數箇結合して居ても、決して戀愛を生ずることは出來ない。青年の妻らなくてはならぬ、即ち、娶るに安全なる女子は、己が思想を支配し、己が行爲を監督し、如何なる事を爲す場合にも、必ず、其の顔を顯すといふ風の婦人で、つまり、己が生涯の全部を支配するところのものでなくてはならぬ。言ひ換ふれば、一時も、其れなくては、淋びしさに堪えられず、活

きて居る空がないといふ様な女でなければならぬ。人々の娶るべきは正に斯の様な婦人である。されば、其の貧富、賢愚等は元より論するに足らないので、況んや旅行の智識をやである。即ち、彼れ、唯だ、愛情に富み、良人の勞苦に同情厚く、其の思想に合同し、又其の善良なる性格を信ずること深ければ、己に充分なのである此等が即ち、女子の特長とすべきもので、良人の全生涯を通じて、永遠、渝ることなきものは實に是れである。斯かる特長をこそ、良妻、賢母を造るに必要とすべきものである。成程、智識は、女子に必要なものには違ない。然れど、夫れよりも更らに、更らに、際限なく必要なるは、此の愛情である。仮令、人、世界第一の暗愚なる女子を娶るも、其の女子にして愛情だにあらば、冷酷、無情なる世界

第一の賢婦人を娶るよりも、遙に、幸福で、又遙に、惻いかなのである。人、壯年の時は、此の情を一笑に附して顧みない、然れど、晩年に及んで、始めて、其の重んずべきを覺り、曾て其の一笑に付し去りたるもの、後却て、其身に大なる助となるべきを悟るであらう

(未完)

いろく

さくら

盲杖櫻

播州明石町の裏手舊城跡のつゝなる丘の上に人丸神社といふあり、前に明石海峡をへたて、淡路島を望み、ゆきかふ真帆片帆幾百といふを知らず、幾千歳をや經たりけん磯馴松のかけに見えつかくれつ、さて社に詣て、石段のかたへに進めは

右手の方玉垣を結びめぐらして一もとの櫻の木ぞたてる。

傍していふ

昔筑紫に盲人ありはるゝ此社に詣で、

はのゝとまことあかしの神ならば

我にも見せよ人丸のつか

かくなんよみければたちまち二つの眼ひらきて始めて物を見るを得たり盲人こよなう喜ひてかれば力とたのみし杖は用なしとて廣庭にざし捨て去りぬしかるに其枝より枝葉生ひ茂りて來る春毎に花咲きぬれば名けて盲杖櫻といふ。

妙計

なにかしといへる紳士はかさを投せんとして郵便函のかたへに立てる折しも其友なる人來あはせたり、紳士の持てるはがきを見るに宛名は紳士自身

なり友なる人怪みてその名宛は御自身にあらすや
 何とてさるることし給ふそと問ふ、これ見給へとて
 文面を示すを見るに。

今夜某亭にて某氏送別の宴を張る來會せざる者
 は罰金として拾圓を科せらるべし

幹事より

とあり紳士曰くわれ今夜深更に及ひて歸るも既に
 このはかさあり荆妻また余を咎めざるべしと。

「すみれ曰く………」

鶏卵を凍らする法

細かくしにる氷又は雪を皿に盛り食鹽をその半
 分はかり加へ交ぜ合せてこれに卵を埋め置けは三
 十分計にして凝結し外殻に裂目を生ず、これを取
 り出して殻を去れば庖刃にて切るともつぶれる事
 なし場合によりては面白き料理ならん。

これにてきり上げ申すべく候おもしろくはながきもよけれそ
 つまらぬ者をなかく書くほどつまらぬものはなし
 すみれ曰くには何なりともさんくさんかき下され度願上候
 さくら

